

「MADムービー」にみる映像制作文化の一考察

中川 浩一

倉敷芸術科学大学芸術学部

(2007年10月10日 受理)

■はじめに

コンピュータの発達・ソフトウェアの進化および撮影機器の低価格化とそれに伴う普及、さらにインターネットとネット環境を利用した You Tube のような動画配信サービスの出現により、一方的な視聴のみであった映像を取り巻く文化が、制作・発信を含めた複合的な様相を呈している。また映像機器・ソフトウェアの操作が容易になり純粋に制作するだけでなく、既存の映像作品をカットアップ、コラージュ、再編集が簡単にできる環境にもある。

こうしたことを背景に新しい映像の楽しみかた＝映像制作文化が出現している。それが MAD ムービーといわれる表現形態である。ここではインターネットで拡大しつつある「MAD ムービー（以下、MAD）」を類型化・観察し、映像制作文化が現時点でどのような方向に向かいつつあるのか考察したい。

■MAD前夜

「映像作品」の流通・普及のためには大きく分けて次の3つの条件が必要である。

ひとつめは当然ではあるが、作品としての映像そのもの。ふたつめには映像を流通させるためのパッケージ化。3つめは流通経路そのものである。

これからの条件を満たすにはそれぞれに大きく高い障壁ともいえるものが存在していた。どうやって映像を作るのか。実写であればいかにして撮影するか。ライトはどう扱うのか。撮影をした後どのようにして編集・加工を行うのか。具体的にはどのような機材が必要なのか。すなわち制作過程そのものが高度にプロフェッショナル化されたものであり、専門の知識を持っているもの、すなわち映像制作現場に従事した経験のあるもの以外にはうかがいしることのできない世界であったのは確かである。また映像そのものを加工・編集する作業自体専門のマシン、デジタル化が進んだ現場でさえ音楽や静止画に比べ桁違いに大きなデータを扱うことができるのはほんの一握りのひとたちであったのは事実であった。完全にプロフェッショナルに特化した世界であるがため、「一般人」にはもはや想像の埒外であった。さらにかかなりの努力と試行錯誤の上、なんとか作品を仕上げるのができたとしてもそれを公開するすべが「一般人」にはない。また流通に適した、あるいは流通の過程に耐えうるようなパッケージ化をすることにも大きな困難が伴う。VHS テープ

なのか、ビデオ CD なのか、DVD ビデオのほうがよいのか。仮にこの障壁を乗り越えたとしても肝心の流通経路がない。かくしてプロフェッショナルではないあくまでも「一般人」が個人として制作した「映像作品」はクオリティの高低にかかわらずその行き先を見失う。

しかしながら高度にデジタル化が進み、その結果プロユースから一般ユースへのドラスティックなシフトが進行している現在においてこれらの諸条件はほぼ無意味となった。

カメラなどの機材は低価格化が進行し、また誰にも扱えるような仕様となっている。さらに映像を編集加工する作業もソフトウエアが肩代わりしてくれる。また最近ではパソコンを購入するとビデオ編集ソフトがもともとインストールされている。またそのマシン自体も急速な進化・高機能化をとげ、従来のスタジオとほぼ同等の編集環境がたった一台のパソコンのなかで実現してしまっている。またネット環境における映像配信のビジネス化、ビデオ再生可能な Apple 社の iPod およびその亜種の出現、携帯電話上での映像視聴などの視聴環境が一足飛びに進化し、パッケージ化におおきな変革をもたらした。すなわちネットの世界で流通させる限りパッケージ化とはもはやそれぞれのプラットフォーム上で再生可能な形式＝ファイル形式を意味しているといっている。

個人ユースの機材はさらに加速度をあげ、TV からのキャプチャーや DVD 画像から静止画や動画を切り出すことも比較的容易にできるようになってきた。

かくして条件は揃い、デジタルとネットの幸せな結合の結果生み出された文化が産声をあげた。進化した MAD の出現である。

■MADの出現

ここでは近年とみに目立つようになってきたネットで流通している MAD、とくにアニメーションを改変・再編集・加工されたものについて述べていきたい。

多く見られる MAD は既存のアニメーション作品のシーンを切り出し、それぞれを組み合わせたたり、順序をいれかえたり、他の作品のカットやシーンを紛れ込ましたり、まったく別分野の曲にそれら切り出された映像をあてて元ネタとなった作品とは別の作品を作り出す映像表現である。

MAD 自体は新しい表現手法ではない。今日のようにデジタル化が進む以前、1970 代末ころから主に大学のサークルで制作されていたといわれている。ただいづれにしても個人が趣味の範囲で行っていたことであり、また当時はノンリニアで編集せざるを得ないことなど技術的・機器的な制約が大きかった。またサークル内の上映会等でしか実際に視聴することは困難であったため、一部のファンやマニアにしかその存在は知られてはいなかった。しかしながら前述のようにインターネット環境の整備、特に You Tube およびニコニコ動画といったサービスの出現、パソコンの高性能化により MAD はポピュラリティを持つものとなってきた。

以下では人気のあるMAD作品をとりあげ、その表現手法に準じて類型化を行っていく。

●ミュージッククリップ型

ポップミュージックの発売に伴いミュージッククリップといわれる映像作品が発表されることが多い。こうしたミュージッククリップの映像文法とでもいうべき構成手法をふまえたMAD作品がこれにあたる。既存の音楽に合わせ、アニメーション作品のシーンをカットアップやコラージュといった手法で再構成していく。素材としての映像を音楽のもつ世界観にどのようにマッチさせるか、また音楽のテンポやリズムにいかにシンクロさせるかが制作者の腕のみせどころである。もっともよく目にするタイプでもある。

・ Candy Pop

< <http://www.youtube.com/watch?v=Ko8tvjR88Mg> >

・ 涼宮ハルヒの Love Cheat!

< http://www.youtube.com/watch?v=XZphD2P_4r0 >

●愛着カットコレクション型

映像機器やソフトウェアの発達によってアニメーション作品から好きなカットを切り出しすることが容易となっている。これを利用し、制作者が自分のお気に入りのカットをコレクションして再編集するタイプのMAD。映像作品ではあるものの静止画のクオリティを追求する傾向があるためスライドショー的な展開がほとんどである。

・ 新バージョン 109 作品アニメ集

< <http://jp.youtube.com/watch?v=oYjUwqumXdI> >

・ アニメーター MAD

< <http://jp.youtube.com/watch?v=5GWRHjIWung> >

●入れ替わり型

これもMADの世界ではポピュラーな手法である。あるアニメーション作品のオープニングシーンなどにまったく別の作品（特に傾向やジャンルの異なる作品）のオープニング曲をあててそのチグハグ感や、逆に意外なくらいなじんでしまっている感じを楽しむタイプ（オープニングMAD）。

・ ひぐ☆すた（ひぐらし解+らきすた）【OP MAD】

< <http://www.youtube.com/watch?v=TjulJiHT5BY> >

・ みんなでバラライカ！！らき☆すたと愉快的仲間達（相撲ロボット製作部）

< <http://jp.youtube.com/watch?v=L2smm82TyIA> >

この発展バージョンとして、あるアニメーション作品のキャラクターをまったく別のアニメーション作品のキャラクターと置き換えるというMADも増えている。これはシーンの再構成のセンスやテクニクだけでなく、キャラクターを置き換えるためにキャラクターを書き換えたりつけ加えたりするため作画のテクニクも要求される。

- ・☆らきすたメイドン☆

< <http://www.youtube.com/watch?v=rChjzxa3NZU> >

- ・ iPod の CM サザエさんバージョン

< <http://www.youtube.com/watch?v=9F7Eo0r6V2E> >

もっともポピュラーな手法であるがゆえにさまざまなアイデアが試されるのもこのカテゴリーでもある。以下の MAD は日本語版と英語版をうまく組み合わせることによって独特の世界を作り出すことに成功している。アイデアと着目点が秀逸である。

- ・ 欧米な人たち

< <http://jp.youtube.com/watch?v=wEhL3dd776k> >

●キャラクターネタ型

さまざまな MAD のなかでもっともアイデアが求められるタイプである。かなりのセンスを要求されるが人気の MAD には良作が多いのもこのタイプの特徴である。

- ・ がんばれムスカ大佐

< <http://jp.youtube.com/watch?v=HRHpDuInhTU> >

以上、人気のある MAD ムービーについて簡単な類型化を試みた。これらは「職人」といわれるネット上の匿名クリエイターたちが制作しているが、彼らは MAD 制作からはなんら報酬を得ていないものと思われる。MAD はもちろんパロディであり版権的にもおおいに問題のあるものばかりであり、故に MAD 制作を推奨するわけにはいかないがその MAD の底流には作品自体への愛情と尊敬がみられるのは間違いないだろう。愛するが故に「いじりたい」のである。また MAD が注目されることにより元ネタのオリジナル作品への注目度が高まるといった事例もあるといわれている。ネットの世界では良作な MAD を生み出す匿名クリエイターを「神」あるいは「才能の無駄遣い」と称しているが、これは立派なほめ言葉である。ネット世界の「神」や「職人」は特定作品への愛情表現として日々 MAD を生み出し、ネット上で不特定多数のひとびとがそれを視聴し、その作品への愛情がさらに広まっていく。版権的な問題点を内包する一方 MAD はその作品の強力なプロモーションであるという一面ももっているのである。

映像制作文化は本来の制作者側からの発信に対し、ややアンダーグラウンドな側面を持ちつつもファン側のレスポンスとしての MAD といったかたちで双方向的で相互貢献的な傾向を持ちつつあるとっていいだろう。もはや作って流すという一方通行なありようでは早晩なりたたなくなっていくのではないだろうか。

参考文献

神田 敏晶『YouTube革命』ソフトバンク新書

WikiPedia「MADムービー」

※MAD資料収集にはゼミ生4回生の山下真未さんの協力を得た。

MAD movie～The cultural aspects

Hirokazu NAKAGAWA

College of Arts,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 10, 2007)

Once video is to make only a very limited failed. It is a professional production only can be.

But, inexpensive software and the emergence of inexpensive computer emergence of the video it is easy to produce.

Therefore, young people MAD movie production can be. And work on the Internet, announced it.

MAD movie is a new movie culture.

This paper is the work that typify the characteristics about.